

【資料】

新生児および乳児の入浴に関する文献検討

Literature Review regarding Bathing of Newborns and Infants

近澤 幸

Sachi Chikazawa

キーワード：新生児，乳児，入浴

Key Words：newborns, infants, bathing

I. はじめに

現代の日本では、核家族化および少子化の進行に伴い、子どもを取り巻く家庭や地域社会が著しく変化している。そして、幼い子どもとの接触体験が乏しく、子育てに関する知識や技術が不十分なまま育児をするという状況が多くなっている。さらに、地域との関係が希薄であり、情報交換や支援獲得の機会も減少している。このため、母子に直接寄り添う専門職として、子育て支援における助産師への期待と責任は大きい。

不慣れな育児やゆとりのない育児状況による困惑は、育児への自信がもてないことや、愛着が形成されないことにつながる(岩谷他, 2013)。また、育児に自信がもてないことで主観的虐待観が高まることや、妊娠・出産・育児に関する知識・意識不足、精神的未熟さなどが虐待の要因となることが指摘されている(井上他, 2014; 河田他, 2013)。

育児に対する不安は、授乳、寝かしつけなど様々である。そのなかでもとくに皮膚トラブルは上位に挙がる(高橋他, 2016)。乳児の表皮は大人に比べ角層が薄く、新生児期から生後2～3ヵ月頃までは脂腺機能が生理的に亢進するため、皮膚トラブルが発症しやすい(山本, 2003)。また、乳幼児期の湿

疹の存在がその後のアトピー性皮膚炎や喘息、食物アレルギーなどのリスクになることが報告されており、母親の育児不安はもとより、乳児の将来にも影響を及ぼすことが予測される(松本, 2014; 下条, 2013; 乃村, 2013)。また、皮膚トラブル発症には入浴の方法が影響を及ぼすとされている(古田他, 2013; 村田他, 2012; 古田他, 2010)。高橋ら(2016)は母親の育児不安には、入浴についての不安が大きいことも明らかにしている。新生児における入浴である沐浴に関しては、主に産褥入院中に母親が指導を受けている。近年、施設での入院期間は短縮化しており、加えて、沐浴に代わり出生時に付着した血液・羊水・胎便などの分泌物を拭き、胎脂はできるだけ取り除かずにそのままにしておく方法であるドライテクニックの導入が増加している。このため、入院中の沐浴の機会は少なく、母親が入院中にわが子の沐浴を実際に実施した経験が少ないまま退院することも多い。また、退院後の沐浴期間について一般書の育児書には、出生後1ヵ月過ぎまでとの記載が散見され(細谷, 2013; 川上, 2013)、家庭風呂での入浴に関しては「いつから」「どのように」実施すればよいのかは不明である。

以上のことから、児の皮膚トラブルを予防するこ

とや、入浴に対する家族の不安を軽減することは、子育て支援の一つとして必要と考える。そのため、妊娠期から産褥期、新生児期および乳児期における児の入浴に対する切れ目ない支援が重要であるといえる。よって本研究は、文献検討により、妊娠期から産褥期における新生児および乳児の入浴に関する研究動向と支援の内容を明らかにした。

Ⅱ. 研究方法

1. 文献検索の方法

『医学中央雑誌』Web版を用い、「新生児」「乳児」「沐浴」「入浴」をキーワードとし、2006年から2016年に発表された看護文献(会議録除く)を検索した(2016年9月14日検索)。その結果、166件が該当した。そのなかで、タイトルおよび抄録から、看護教育に関する文献、海外での入浴方法に関する文献、解説文献を除いた原著論文24件を分析対象とした。

2. 用語の定義

- 1) 新生児:「生後4週目(28日)未満の児」とした。
- 2) 乳児:「生後4週目(28日)以降1年未満の児」とした。
- 3) 新生児および乳児の入浴:「養育者または医療者が新生児および乳児に行う沐浴および家庭風呂」とした。
- 4) 沐浴:「養育者または医療者が新生児および乳児に行うベビーバスでの入浴」とした。
- 5) 家庭風呂:「養育者または医療者が新生児および乳児に行う自宅の浴槽での入浴」とした。

3. 分析方法

妊娠期から産褥期、新生児期および乳児期の切れ目ない支援が重要であると考え、各期の実態や支援について焦点を当て、24件の文献の分析を行った。

分析の視点は、「出産・育児準備期」「分娩・産褥期(入院中)」「産褥期(退院後)」の各期における入浴に関する支援の内容とした。

Ⅲ. 結果

分析した24件の概要について表1に示した。

1. 新生児および乳児の入浴に関する研究動向

研究件数は、2006年4件、2007年1件、2008年2件、2009年2件、2010年1件、2011年3件、2012年4件、2013年3件、2014年1件、2015年3件、2016年0件であった。

1) 出産・育児準備期

出産・育児準備に関する研究は2件(No6, 10)であった。目的は、どちらも出産・育児準備の情報源についての調査であった(No6, 10)。

2) 分娩・産褥期(入院中)

分娩・産褥期の入院中に関する研究は16件(No2～5, 7～9, 12, 13, 15, 17～20, 23, 24)であった。目的は、ドライテクニックの有効性の検討7件(No4, 7, 8, 12, 13, 15, 20)、方法の実態調査2件(No3, 18)、不安の実態調査1件(No24)、NICU・未熟児室での指導の検討3件(No5, 9, 23)、皮膚トラブルをもつ児の親に対する指導の検討2件(No2, 19)、産褥入院中の指導の検討1件(No17)であった。

3) 産褥期(退院後)

産褥期の退院後に関する研究は6件(No1, 11, 14, 16, 21, 22)であった。目的は、初産婦の育児における悩み1件(No1)、洗顔方法による皮膚トラブル発生の実態調査1件(No14)、アトピー性皮膚炎の子どもをもつ母親のスキンケアへの取り組みや困難1件(No21)、双子の入浴時の工夫の調査1件(No16)、新生児・乳児訪問時の指導内容2件(No11, 22)であった。

2. 新生児および乳児の入浴に関する支援の内容

1) 出産・育児準備期

出産・育児準備期における支援の実態を明らかにしている研究はなかった。妊婦は友人、実母、マタニティ雑誌などの情報を元に出産・育児の準備を行っていた(No6, 10)。

2) 分娩・産褥期(入院中)

褥婦が沐浴を実施する割合は、産後3日目以降から増加し、産後4日目には30%弱の施設で褥婦が沐浴を行っていた(No3)。しかし、入院期間中に褥婦が一度も沐浴を実施しない施設も54.3%存在した(No3)。

入院中に行われる育児指導のなかで、沐浴指導に

表1 新生児および乳児の入浴についての研究概要

No	著者(年)	①タイトル	②目的	③入浴に関する結果
1	遠藤幸恵, 他 (2015)	①初めて育児を体験する母親の悩み 出産後2～3か月の現状調査から ②初産婦が1か月乳児健診後に感じた心配事や不安, 育児に不慣れな時期の過ごし方の調査 ③サポートがなくなって困ったこと: 沐浴を一人で入れる		
2	古田祐子 (2015)	①乳児の肌トラブル発症に影響を及ぼす沐浴教育要因 ②乳児の肌トラブル発症に影響を及ぼした沐浴教育の要因の調査 ③乳児の肌トラブル発症に影響を及ぼした沐浴教育要因: 洗いとすすぎ, 洗剤等に対する説明不足, 洗顔後のすすぎと 頭部洗浄の実践教育の不足, ベビーバス長期使用の弊害やベビー用化粧品に関する情報提供不足, 洗い残しが無い丁寧な洗いや十分なすすぎを阻害する制限された沐浴所要時間		
3	細坂泰子, 他 (2015)	①新生児清潔ケアの実態とケア選択の探索—混合研究法を用いて— ②全国産科施設における新生児清潔ケアの実態と, 助産師の新生児清潔ケアに対する思いやケアを実践することの助産師 なりの意味づけの調査 ③全国横断調査結果: 出産当日はドライテクニックが, 生後1日目以降は沐浴が多い 所要時間: ドライテクニックの方が短い 清潔ケアについての助産師の決定基準: 新生児の負担や汚れなど 褥婦が沐浴を実施する割合: 産後3日目以降から増加, 産後4日目には3割弱 入院期間中に褥婦が一度も沐浴を実施しない施設: 54.3%		
4	伊藤沙織, 他 (2014)	①ドライテクニック導入への取り組み～アクションリサーチの手法を用いて～ ②ドライテクニックを導入する方法の検証 ③スタッフの知識不足が指摘されたが, 業務改善につながるなど, ほとんどが導入に賛成 母親のほとんどが肯定的だが, 首の後ろに垢がたまり湿疹ができたとの意見もあった		
5	川合美奈 (2013)	①NICUスタッフによる父母への育児指導の必要性の認識と実施状況 ②NICU児の父母への育児指導の必要性の認識および実施状況についての調査 ③必要と認識している育児指導: 沐浴73.5%		
6	及川裕子, 他 (2013)	①初産婦における出産・育児の準備の実態 ②初産婦の物的・身体的・心理的な出産・育児準備の検討 ③年代別の情報源の傾向: 若年群「実母」「マタニティ雑誌・育児書」 高年齢群「友人」「兄弟姉妹」		
7	篠原佳世乃, 他 (2013)	①「ドライテクニック」導入後のスタッフの意識および現状調査によりみえてきたこと—手技の統一化にむけて— ②ドライテクニックに関する現状調査 ③出生1～4日目までは温タオルにて「ドライテクニック」を行い, 5日目から沐浴を実施 出生1日目の児の清拭部位: 「顔面」「頭部」など 出生4日目: 「全身」「顔面」など		
8	後藤千尋, 他 (2012)	①新生児のドライケアに関する実態調査 ②ドライケアの実態の調査 ③スタッフの皮膚の観察に対する意識が低い 体重, 排泄回数, 黄疸に対する観察が優先		
9	杉村千春, 他 (2012)	①NICUにおける育児指導の実態調査と評価の分析—院外出生の親子への指導を振り返って— ②育児指導 (オムツ交換, 沐浴, 授乳) に対する評価 ③沐浴指導についての平均評価値 (5段階評価) は初産婦4.69, 経産婦4.65		
10	寺嶋智穂, 他 (2012)	①出産・育児の準備の実態 (第1報) —初産婦の違いに焦点を当てて— ②妊婦の出産育児準備に関する情報源の調査 ③役立った情報源: 初産婦 友人, マタニティ雑誌, 看護師・助産師, 兄弟姉妹, 実母 経産婦 友人, 実母, 看護師・助産師, インターネット, マタニティ雑誌		
11	内田貴峰 (2012)	①母子の継続的支援における新生児訪問の実態 ②新生児訪問における支援内容と支援の際に困ったと感じたケースの調査 ③半数以上が実施したもの一つとして清潔が挙げられた		
12	小林久枝, 他 (2011)	①ドライテクニックの有用性についての検討 新生児清潔ケアの見直しを試みて ②ドライテクニックの有効性の検討 ③生理的体重減少率: ドライテクニック群では抑制 5日目までの臍脱率, 皮膚トラブルの発生率: 効果あり 質的・量的に業務の削減に有益		

No	著者(年)	①タイトル	②目的	③入浴に関する結果
13	鈴木里加, 他 (2011)	①早期新生児期における清潔ケアの見直し ②沐浴とドライテクニクの母子への影響の検討 ③体温:沐浴群では上昇, ドライテクニク群では下降 体重減少:減少率が沐浴群に比べドライテクニク群の方が有意に低い 臍帯脱落:ドライテクニク群が早い 黄疸:有意差なし		
14	土浜敏子, 他 (2011)	①新生児の自宅における沐浴の実態調査～乳児湿疹予防のための石けん洗顔の現状～ ②乳児湿疹予防に焦点を当てた新生児の自宅における沐浴の実態の調査 ③1ヵ月健診時に乳児湿疹があった児:69.3% 湯拭き洗顔をしていて乳児湿疹があった児:100% 石鹸洗顔をしていて乳児湿疹があった児:75.0%		
15	阿見鮎美, 他 (2010)	①沐浴からドライテクニクへ変更の効果 ②ドライテクニクの有効性の検討 ③生理的体重減少率, 体温の変化:有意差なし 光線療法実施率や臀部発赤発生率:ドライテクニク群では沐浴群より低い ドライテクニク群は安全性が高く, 時間の短縮, コスト削減につながっている		
16	遠藤智子 (2009)	①乳児期の双子の母親が, 沐浴・入浴時に行っている工夫 ②沐浴・入浴時に行っている工夫についての聞き取り調査 ③問題:2人の沐浴・入浴は母親の体力消耗が大きく安全確保が難しい, 湯冷め, 母親自身の入浴まで手が回らない, 一人ひとりの子供たちに合わせられない 工夫:援助者と連携する, 道具を使用する, 気楽に構える, 周囲の環境を整える		
17	中井敦子, 他 (2009)	①産褥1ヵ月における家庭での沐浴実施状況からみた入院中の沐浴指導に関する評価 退院後のアンケート調査から ②見学のみで実施している沐浴指導の検討 ③退院してから困ったこと:初産婦・経産婦ともに鼻・耳掃除, 背部の洗い方, 家庭風呂への移行の時期や入れ方など見学のみでは触れられていない内容について困っていた		
18	小林美代子, 他 (2008)	①早期新生児期における保清方法の実態調査 ②早期新生児期における保清方法の実態の調査 ③出生直後に清拭, 1日目以降は連日沐浴を行う施設が多かった		
19	宮城由美子, 他 (2008)	①身体の洗浄方法を変え皮膚改善がみられた子どものスキンケア現状 皮膚トラブルを心配してアレルギー外来受診した子ども ②指導前のケア方法についての調査 ③乳幼児期においても素手で洗ったり, 洗浄剤を使用したりしていなかった		
20	江戸由佳子, 他 (2007)	①母子同室時間延長を狙った清潔ケアの見直し 母子への影響から見た沐浴とドライテクニクの比較 ②ドライテクニクの効果の検討 ③効果:清潔ケアに要する時間の短縮による母子同室時間の延長 直接母乳回数の増加, 退院時の自律授乳確立率, 新生児の体重減少率のいずれにおいても有用		
21	長谷川友里, 他 (2006)	①アトピー性皮膚炎の子どもをもつ母親のスキンケアへの取り組み ②アトピー性皮膚炎の子をもつ母親のスキンケアへの取り組み, ならびに困難と考えている点の調査 ③入浴についての悩みがある:約60%		
22	宮城章子 (2006)	①新生児・乳児訪問指導内容の分析 ②母親に対する指導内容, 訪問時期による指導内容の変化の検討 ③新生児期, 乳児期ともにスキンケア・沐浴に関する指導が行われていた		
23	森 淑江, 他 (2006)	①児が未熟児室に入院となった母親の不安を軽減できる育児技術指導の検討～母親が参加できる指導方法を導入して～ ②未熟児室での指導効果の検討 ③沐浴などの育児技術に関してチェックリストを用いた指導群の不安スコアは指導開始時よりも退院時のほうが高く, 参加型指導群の不安スコアは退院時のほうが低かった		
24	澤美保子, 他 (2006)	①児がNICUに入院した母親への育児指導内容の検討 ②初産婦と経産婦の育児に関する不安の調査 ③電話相談時の相談:二番目に「沐浴」が多かった		

対する母親からの評価は高かった (No9)。指導の方法として、参加型の指導を受けた場合は退院時に不安が軽減していた (No23)。しかし、指導を受けていても、退院後には初産婦・経産婦ともに鼻・耳掃除、背部の洗い方、家庭風呂への移行時期や入れ方など、見学のみによる入院中の沐浴指導では触れられていなかったことについて困っていた (No17)。NICUにおいては、児が入院した親の不安の上位に沐浴が挙がり (No24)、スタッフも沐浴に関する指導の必要性を認識していた (No5)。

この他、皮膚トラブル発生には入院中の入浴の指導が影響を及ぼしていた (No2, 19)。乳児の皮膚トラブル発症に影響を及ぼしたと考えられる沐浴指導の要因として、洗いとすすぎや洗浄剤等に対する説明不足、洗顔後のすすぎと頭部洗浄の実践教育の不足、ベビーバス長期使用の弊害やベビー用化粧品に関する情報提供不足、洗い残しが無い丁寧な洗いや十分なすすぎを阻害する制限された沐浴所要時間などが明らかになった (No2)。

児への直接的な支援として、生後日数によるドライテクニックと沐浴の使い分けについては、出生当日のみドライテクニックを行い以降は沐浴を行う施設 (No18)、生後4日目までドライテクニックを行う施設 (No7) があった。また、ドライテクニック実施部位については、新生児の負担や汚れなどを基準にして清拭部位を決定する (No3)、出生1日目は顔面や頭部、出生4日目には全身を清拭する (No7) となっていた。ドライテクニックの効果としては、臍帯脱落促進 (No12, 13) や皮膚トラブルの予防 (No12, 15)、光線療法実施率の低下 (No15)、時間短縮 (No3, 12, 15, 20) などがあった。体重減少に関しては、効果が明らかであったもの (No12, 13) と有意差がないもの (No15) があった。ほとんどのスタッフや母親がドライテクニックに対して肯定的であったが、母親のなかには首の後ろに垢がたまり湿疹ができたという意見もあった (No4)。また、スタッフは体重、排泄回数、黄疸に対する観察を優先しており、皮膚の観察に関する意識が低いことが指摘された (No8)。

3) 産褥期 (退院後)

退院後については、家族などのサポートや新生児訪問に関する実態が明らかにされている。初産婦では、サポートが受けられなくなった後の困難として、一人で行う入浴が挙げられた (No1)。双子の場合には、母親の体力消耗が大きく安全確保が難しいなどの問題があり、援助者と連携するなど工夫をして入浴を行っていた (No16)。新生児訪問では、実施されている指導内容として入浴に関することも挙げられていた (No11, 22)。

この他、アトピー性皮膚炎を抱える児の母親は、入浴やスキンケアに戸惑いがあることや (No21)、退院後の乳児湿疹の出現に、洗顔方法が影響すること (No14) が明らかにされていた。

IV. 考察

1. 新生児および乳児の入浴に関する支援

出産・育児準備期には、一般的に、妊婦健診や母親教室、両親教室において沐浴の必要物品や方法について疑似体験やDVDの視聴などが行われている。調査でも、多くの妊婦が友人、実母、インターネットなど様々な方法で情報を得て、準備を行っていた (No6, 10)。このため、得た情報がそれぞれの家庭にとって適切に応用できる情報として整理されているかどうかは不明である。しかも、産褥入院中には、ドライテクニックの導入によって、母親の沐浴実施経験がない場合もある (No3)。また、皮膚トラブルの発生にも沐浴指導が関与しており (No2, 19)、沐浴指導の必要性についてはスタッフ・母親ともに認識している (No5, 9, 24)。こうした状況から、妊娠中には、妊婦が活用している資源を確認し、各家庭に合わせた具体的なイメージの構築とそれに合わせた必要物品の準備を進める支援、可能な限りでの具体的な技術習得への支援が重要と考える。また、産褥入院中の母親に対する指導方法として、参加型が有効 (No17, 23) であるとされており、実際に体験しないまま退院することで、知識や技術の習得が不十分となる。このため、DVDの視聴やパンフレットを用いた指導、モデル人形を用いた沐浴体験などが行われている。しかし、これらの指導

方法では一般的な沐浴方法のみとなり、母子の特性を踏まえた指導ではないため、自宅で実施する際に困りごとが発生することが予測される。実際に、沐浴の方法、指導における実践や情報提供の不足が新生児および乳児のスキントラブル発生に影響している (No2, 14) との報告や、3ヵ月児健康診査を受診した児についての母親の相談事は「皮膚の手当て」が最も多い (村井他, 2014) との報告もある。そのため、母子の特性を踏まえた具体的な技術習得への支援が必要と考える。しかし、入院期間の短縮化や沐浴実施機会の減少という状況のなかで、産褥入院中のみで支援を行うことは困難であり、新たな支援の検討が必要と考える。

さらに近年、父親の育児参加の重要性がいわれている。社会的にも「イクメン」という言葉が浸透し、父親の育児参加への意識が高まっている。1歳6ヵ月児をもつ父親の入浴に関する参加状況としては、47.7%が週3回以上行っていると回答 (北原他, 2015) し、入浴は父親が担当しやすい育児参加であると思われる。また、入院中の児とのふれあいで父親がよかったと感じる内容の一つとして沐浴があり、退院後の育児参加に効果があるとされている (大石他, 2006)。そのため、父親も入院中から児の入浴に関わることができるよう機会を調整することが望ましいと考える。しかし、母親と同様、入院期間の短縮化や沐浴実施機会の減少の状況に加え、父親が母親のクリニカルパスに沿って育児指導を受けるために、仕事を調整することが容易でないことは想像に難くない。

また、退院後の入浴については、それぞれの家庭で工夫しながら協力して児の入浴を行っている (No16) が、協力が得られなくなると母親が一人で行う入浴を困難と感じたり (No1)、家庭風呂への移行時期や入れ方に困ったりしたと挙げられている (No17)。また、新生児訪問における入浴に関する指導のニーズも明らかとなっている (No11, 22)。

以上のことから、家庭で準備している物品や、予測される困りごとなどを踏まえた、母親や家族などそれぞれの家庭に応じた指導が必要といえる。さらに、母親だけでなく、父親を含む家族による入浴の

実施状況、情報源、実施の際の困りごとや工夫についても明らかにするとともに、切れ目ない支援として沐浴から家庭風呂への移行をスムーズにするために、家庭風呂に関する具体的な指導内容や方法についても検討していくことが望まれる。それらによって、妊娠中、産褥入院中、または、2週間健診や1ヵ月健診時の指導や支援についての検討が可能となる。

さらに、出産施設を介さず行われる切れ目ない看護実践の動きとして、2004年に創設された養育支援訪問事業から2007年には乳児家庭訪問事業が行われている。さらに、2013年には未熟児訪問事業が市町村に移譲され、改めて訪問事業が注目されている。訪問事業は、コミュニケーションが苦手、外に出ることがおっくうなどの理由から、公的な健診や教室に参加することなく密室での育児を行っている母親がおり、こうした母親への支援に重要な役割を果たしていることが推察され、入浴についても訪問事業の活用は切れ目ない看護の一翼を担うものと思われる。

2. 新生児および乳児の入浴方法

日本における分娩直後の清潔ケアは、古来より産湯につける方法をとってきた。これは、新生児の保温や血液という穢れたものを洗い清めるという日本の文化的思想などの点から、伝統的に行われてきた。一方で、1974年にアメリカ小児科学会から「ドライテクニクの勧告」が提唱された。このことをきっかけとして、日本でも分娩直後の第一沐浴が中止され、その後、入院中の沐浴も中止する施設が増加してきた。

ドライテクニクには皮膚トラブルの予防など様々な効果が報告され (No12, 13, 15, 20)、児にとって負担の少ない入浴方法であり、実施時の工夫についても様々な取り組みがある (No3, 7, 18)。しかし、皮膚観察に対するスタッフの意識が低い (No8) ことや垢の除去が十分ではなく湿疹ができた (No4) など、不十分な観察や不適切な手技である場合、逆に皮膚トラブルの発生につながると考えられる。また、皮膚トラブルを有する児の母親が入浴について悩んでおり (No21)、乳幼児期の皮膚の洗浄方法の変更によって、児の皮膚トラブルが改善する

(No19)。昨今では、髪専用のシャンプーの使用、泡立てた石けんでの洗浄、シャワーを使ったすすぎなど、新たな方法を導入する施設もみられている。このような新たな方法の有効性の検討や、家族や児に合わせた新しい入浴方法の開発が必要と考える。

V. 結論

妊娠期から産褥期における、新生児および乳児の入浴に関する研究動向と支援の内容を明らかにすることを目的に文献検討を行った。それにより、以下のことが明らかになった。

1. 分娩・産褥期の入院中に関する研究は多いが、出産・育児準備期、産褥期の退院後に関する研究は少ない。とくに、退院後に母親や家族が何に困っているのかという実態については研究が少なく、明確になっていない部分が多い。
2. 実際に沐浴体験をしないまま退院する母親が半数を上回っている状況である。
3. ドライテクニックが導入されており、皮膚トラブルの予防や時間短縮など様々な点において有用である。
4. 新生児・乳児訪問において入浴に関するニーズがある。
5. 切れ目ない支援を行うために、母親だけでなく、父親を含む家族による入浴の実施状況、情報源、実施の際の困りごとや工夫を明らかにし、新しい入浴方法や、家庭風呂を含む入浴方法に関する具体的な指導内容・方法について開発していくことが必要である。

利益相反

本研究による利益相反は存在しない。

謝辞

本研究を実施するにあたり、丁寧に御指導くださいました教授 佐々木綾子先生、教授 土手友太郎先生、准教授 久保田正和先生に深謝申し上げます。

文献

阿見鮎美, 高松祐可, 君島清美, 他 (2010): 沐浴からドラ

- イテクニックへ変更の効果, 栃木母性衛生, 36, 34-36.
- 江戸由佳子, 津川博美, 平川真由美 (2007): 母子同室時間延長をねらった清潔ケアの見直し 母子への影響からみた沐浴とドライテクニックの比較, 日本看護学会論文集 母性看護, 37, 39-41.
- 遠藤幸恵, 津島孝子, 小田切宏恵 (2015): 初めて育児を体験する母親の悩み 出産後2~3か月の現状調査から, 盛岡赤十字病院紀要, 24(1), 67-70.
- 遠藤智子 (2009): 乳児期の双子の母親が, 沐浴・入浴時に行っている工夫, 日本看護学会論文集 地域看護, 39, 57-59.
- 古田祐子, 安河内静子 (2010): 皮膚トラブルを有する生後3ヵ月未満児の表皮 pH・水分量・皮膚温の皮膚洗浄前後の変化, 母性衛生, 51(2), 320-328.
- 古田祐子, 安河内静子 (2013): 乳児の皮膚トラブルに対する皮膚洗浄法の有用性—ある助産師の皮膚洗浄技術の効果から—, 日本看護技術学会誌, 11(3), 35-45.
- 古田祐子 (2015): 乳児の肌トラブル発症に影響を及ぼす沐浴教育要因, 福岡県立大学看護学研究紀要, 12, 1-11.
- 後藤千尋, 名取佳子, 酒井友美 (2012): 新生児のドライケアに関する実態調査, 川崎市立川崎病院内看護研究集録, 66, 6-9.
- 長谷川友里, 緒方 京, 高橋弘子 (2006): アトピー性皮膚炎の子どもを持つ母親のスキンケアへの取り組み, 愛知母性衛生学会誌, 24, 25-32.
- 細坂泰子, 茅島江子, 抜田博子 (2015): 新生児清潔ケアの実態とケア選択の探索—混合研究法を用いて—, 日本助産学会誌, 29(2), 240-250.
- 細谷亮太 監修 (2013): 最新決定版はじめての育児, 株式会社学研マーケティング, 70-72, 東京.
- 井上みゆき, 篠原亮次, 鈴木孝太, 他 (2014): 母親の主観的虐待観と個人的要因および市区町村の対策との関連—健やか親子21の調査から—, 小児保健研究, 73(6), 818-825.
- 伊藤沙織, 高村ゆりえ, 熊谷由果, 他 (2014): ドライテクニック導入への取り組み—アクションリサーチの手法を用いて—, 盛岡赤十字病院紀要, 23(1), 60-68.
- 岩谷久美子, 清輔裕子 (2013): 乳児期までの障害のない子どもをもつ初産婦の「育てにくさ」の概念分析 Rodgersの概念分析の方法を用いて, 梅花女子大学看護学部紀要, 3, 1-12.
- 河田さなえ, 泉川孝子 (2013): 判例からみる子ども虐待の虐待者および被虐待者の要因の検討 看護職の役割と支援のあり方, 奈良県母性衛生学会雑誌, 26, 56-59.

- 川合美奈 (2013) : NICUスタッフによる父母への育児指導の必要性の認識と実施状況, 北海道医療大学看護福祉学部学会誌, 9(1), 81-85.
- 川上 義 監修 (2013) : たまひよ新・基本シリーズ 初めての育児, 株式会社ベネッセコーポレーション, 34-36, 東京.
- 金 彩香, 平元 泉 (2013) : 1歳6ヵ月の子どものお風呂の入れ方についての実態調査, 秋田県母性衛生学会雑誌, 26, 44-48.
- 北原 綾, 杉本昌子, 林 知里, 他 (2015) : 1歳6ヵ月児をもつ父親の育児行動に関係する要因の検討～6つの育児行動に着目して～, 小児保健研究, 74(5), 630-637.
- 小林久枝, 石川有子, 熊 香織, 他 (2011) : ドライテクニックの有用性についての検討 新生児清潔ケアの見直しを試みて, 日本看護学会論文集 母性看護, 41, 25-28.
- 小林美代子, 池田かよ子, 河内浩美, 他 (2008) : 早期新生児期における保清方法の実態調査, 新潟青陵大学紀要, 8, 99-106.
- 松本健治 (2014) : アレルギーマーチ 疾患の自然歴と修飾因子アレルギーマーチは湿疹から始まる, 日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会誌, 12(1), 22-25.
- 宮城章子 (2006) : 新生児・乳児訪問指導内容の分析, 沖縄の小児保健, 33, 18-20.
- 宮城由美子, 稲富紀代, 山本八千代 (2008) : 身体の洗浄方法を変え皮膚改善がみられた子どものスキンケア現状 皮膚トラブルを心配してアレルギー外来受診した子ども, 日本看護学会論文集 小児看護, 38, 231-233.
- 森 淑江, 密岡ルミ, 鈴木美穂 (2006) : 児が未熟児室に入院となった母親の不安を軽減できる育児技術指導の検討～母親が参加できる指導方法を導入して～, 磐田市立総合病院誌, 7(1), 30-35.
- 村井智郁子, 林 知里, 横山美江 (2014) : 母親の育児に関する相談事と背景要因 —3ヵ月児健康診査のデータ分析から—, 日本公衆衛生看護学会誌, 3(1), 2-10.
- 村田千代子, 古田祐子 (2012) : 達人に学ぶ看護の技—トラブルを有する乳児の肌を蘇らせる皮膚洗浄法—, 日本看護技術学会誌, 11(1), 38-41.
- 中井敦子, 細川喜美恵, 堀内美由紀, 他 (2009) : 産褥1ヵ月における家庭での沐浴実施状況からみた入院中の沐浴指導に関する評価 退院後のアンケート調査から, 日本看護学会論文集 母性看護, 39, 51-53.
- 乃村俊史 (2013) : 「初診に帰って考えよう」炎症性疾患 乳児アトピー性皮膚炎「それってほんとうにアトピーですか?」, Derma, 208, 1-4.
- 及川裕子, 宮田久枝, 新道由記子 (2013) : 初産婦における出産・育児の準備の実態, 園田学園女子大学論文集, 47, 95-104.
- 大石百合子, 鈴木かおり, 鈴木さきゑ (2006) : 父親と児の早期接触における育児参加の実態調査, 袋井市立袋井市民病院研究誌, 15(1), 87-92.
- 大久保明奈, 増木菜美子 (2011) : アトピー性皮膚炎をもつ乳児の母親への援助—皮膚状態に合わせた軟膏の使い方—, 東邦看護学会誌, 8, 1-5.
- 澤美保子, 上田和美, 國弘健二 (2006) : 児がNICUに入院した母親への育児指導内容の検討, 日本看護学会論文集 小児看護, 36, 190-191.
- 下条直樹 (2013) : 【食物アレルギー 根拠に基づいたマネジメントのポイント】食物アレルギーの発症にかかわる要因と予防・寛解への糸口 アレルギーマーチとスキンケアの重要性, 薬局, 64(3), 443-447.
- 篠原佳世乃, 阪本亜紀子 (2013) : 「ドライテクニック」導入後のスタッフの意識および現状調査によりみえてきたこと—手技の統一化にむけて—, 奈良県母性衛生学会雑誌, 26, 18-20.
- 杉村千春, 仁科朋子, 加藤美保, 他 (2012) : NICUにおける育児指導の実態調査と評価の分析～院外出生の親子への指導を振り返って～, 藤枝市立総合病院学術誌, 18(1), 67-72.
- 鈴木里加, 中村かおり (2011) : 早期新生児期における清潔ケアの見直し, 名古屋市立病院紀要, 33, 81-83.
- 高橋愛美, 齋藤益子, 渡邊知佳子 (2016) : 産褥期に母親が抱える不安—入院中と退院後の不安の変化—, 日本母子看護学会誌, 9(2), 103-110.
- 寺嶋智穂, 宮田久枝, 新道由記子, 他 (2012) : 出産・育児の準備の実態 (第1報) —初経産の違いに焦点をあてて—, 兵庫県母性衛生学会雑誌, 21, 49-54.
- 土浜敏子, 臼田美奈子, 田中有子, 他 (2011) : 新生児の自宅における沐浴の実態調査～乳児湿疹予防のための石けん洗顔の現状～, 川崎市立川崎病院院内看護研究集録, 65, 5-7.
- 内田貴峰 (2012) : 母子の継続的支援における新生児訪問の実際, 埼玉医科大学短期大学紀要, 23, 55-59.
- 山口 求, 今村美幸, 松高健司, 他 (2009) : 乳幼児のスキンケアに関する研究 シュガースクラブの効果, 日本小児看護学会誌, 18(1), 59-64.
- 山本一哉 (2003) : どうする・外来診療 こどもの皮膚病: 診察からアトピー性皮膚炎まで, 8-9, 永井書店, 大阪.